学校外のオンライン空間における社会人との対話が中高生のキャリア探索にもたらす効果の一考察

古屋星斗
（リクルートワークス研究所）

山本将裕
（はたらく部）

問題と目的

職業社会の近年の変化により、若年者が自己の意思でキャリアを選択する機会が早期化している。一例をあげれば、ジョブ型採用という職務限定型の新卒採用が浸透しつつあり、2023 年卒採用で大卒採用を実施した企業の 9.2%が行っているという調査もある（リクルート就職みらい研究所,2023）。これは学生が専門とする希望職種を申告する採用形態である。これまでの総合職やエリア限定職といったものではなく、知財専門職採用等が実施されている。また、手あげ制異動と呼ばれるポスティング制度（希望の部署へ異動できる制度）も浸透しつつある。配転命令によって人事がキャリアを決定してきた職業社会の状況が転換し、キャリアを主体的に決定するタイミングが著しく早まり、また増加している状況が存在する。キャリアの自律が早期に求められる状況に対応する様々な実践が存在するが、よりたくさんの・多様な属性の若年者に機会を提供しうるという観点、そして選択する機会の早期化を体感する若手社会人との対話を活用するという観点から、学校外におけるオンライン空間を用いた取り組みに注目する。

方法

本発表で題材とする「はたらく部」は、社会人コーチと 10～15 名の中高生で形成するクラスにおけるワークショップを実施するオンラインキャリア教育プログラムである。オンラインセッションは月 3 回実施、社会人コーチとの対話やフィードバックだけでなく、同年代のメンバーと協働し考えをまとめ他者にプレゼンテーションする活動を行っている。また、「オンライン部室」を構築、全国各地の同年代の中高生や様々な社会人との日常的な雑談や対話を行う場や、アイデアコンテスト等を定期的に開催する場も設ける等、学校の中の世界とは異なる考えや価値観に触れ、自己や他者の理解を目的に活動している。はたらく部へ参加する高校及び中学生の生徒について、プログラムへの参加開始時点（time1）と 2023 年 8 月 2 日～24 日(time2)の調査を実施した。Time1 への回答者数は 61 名、time2 へは 84 名、2 時点両方へ回答した者の数は 32 名、両方へ回答した者では高校 1 年生が 9 名、2 年生が 8 名、3 年生が 6 名、中学生が 8 名、無回答が 1 名。回答については個人を特定しないデータとして分析するものとして各自の同意を得て収集した。設問については、time2 でキャリア探索行動を中心とする個人のキャリア形成に関する尺度を聞いた。キャリア探索行動については安達(2008)における尺度（自己探索及び環境探索の 13 項目）を、対象者に合わせて文言を一部修正して用いた。また、フリーワード設問として「10 年後のあなたはどんな風になっていたいですか？」と 2 時点共に聞いており記載内容の変化を取り上げる。なお、回答者によってプログラムへの参加開始時点が異なり、開始時点からの期間は time2 回答者において、3 か月未満が 35 名、3 か月以上が 49 名であった。

結果

まず、time2 におけるキャリア形成に対する全体状況として、「自分の将来のために取り組んでいることはありますか？」に対し「ある。十分に取り組んでいる」「ある。それなりに取り組んでいる」（5 件法での質問の上位 2 つ）と回答した者は 42.9%であった。多くが必ずしも明確な目標へ向けて取り組んでいる認識ではない様子

がうかがえるが、より具体的な行動に視点を定めキャリア探索行動を聞いた場合にはどうか。参加期間別のキャリア探索行動についての回答状況は、図表１のとおりであった（「非常によく行った」から「全く行わなかった」までのリッカート尺度５件法で測定）。概ね、参加期間が３か月未満の短期の者と３か月以上の長期の者では３か月以上の者において高いスコアとなっているが、サンプルサイズの問題もあるためｔ検定による有意検定を実施、「自分という人間について考えてみる」「これまでの自分の生き方について振り返ってみる」について5%水準で３か月以上の者が高い点について有意な結果となった。また、10%水準ではあるものの「興味がある仕事に関する情報を集める」「興味がある仕事に必要な知識や資格について調べる」が３か月以上の者が高い。また、ほかの質問についてはすべて10%水準で有意な結果ではなかった。

図表１　参加期間とキャリア探索行動の状況

	3か月未満	3か月以上	有意検定
自分の長所や短所について考えてみる	3.54	3.86	－
自分という人間について考えてみる	3.63	4.12	5%水準
これまでの自分の生き方について振り返ってみる	3.14	3.69	5%水準
これからの自分の生き方について想像してみる	3.91	4.14	－
自分が好きなこと、得意なことについて考えてみる	3.89	4.10	－
自分が嫌いなこと、不得意なことについて考えてみる	3.66	3.94	－
将来の仕事について友人や先輩、家族などから話を聴く	3.26	3.31	－
仕事や働くことについての番組を観たり、講演会を聴きに行く	2.94	2.96	－
社会人から仕事や働くことについて話を聴く	3.43	3.59	－
本や雑誌、ネットなどで仕事に関連する記事を読む	3.06	3.47	－
興味がある仕事に関する情報を集める	3.34	3.80	10%水準
興味がある仕事に就くための方法を調べる	3.43	3.37	－
興味がある仕事に必要な知識や資格について調べる	3.26	3.71	10%水準

プログラムへの参加期間においてキャリア探索行動との間で一定の関係性が見られることは、「はたらく部」のプログラムの特性を鑑みればこれまで接点のなかった他者（社会人コーチ）との対話がキャリアに関する内省を促すプロセスの生起を示唆する。もちろん、図表１の結果については単一時点回答であり関係は因果推論できない（キャリア探索行動が多い者だけが長期参加者になる関係も推論可能）。この点について本調査ではtime1とtime2共通の質問として「10年後のあなたはどんな風になっていたいですか？」と聞いた。この回答内容の比較から参加による変化を辿ることを試行する。

高校２年生の男性はtime1では「農業法人を経営している」と回答し、time2では「農業のベンチャーを立ち上げ、上場を目指している」と回答した。農業ビジネスに携わりたい気持ちに変わりはない様子だが、そのプロセスとして上場を目指す経営者を志向する点が具体化している。こうした“深掘り”パターンの回答者がひとつのグループとして見られる。高校３年生の女性はtime1では「自己肯定感が高い人」と回答し、time2では「動物福祉の発進浸透において活躍している人物」と回答した。何かなりたいことを“発見”するグループも見られる。高校２年生の男性はtime1では「システムエンジニアで新しいものを沢山仲間と開発してる」、time2では「自分で会社を経営していたい」と回答した。こうした“変化”した回答も見られた。

考察

当該プログラムの参加によって、キャリア探索行動への一定の影響が示唆される結果となった。職業生活上の目標の明確化という観点だけで見ればその効果は限定的かもしれないが、前段階のプロセスとなるキャリア探索行動に注目する重要性が浮かび上がっている。なお、本調査の限界としてtime1とtime2で共通の質問が乏しくパネル形式での定量的分析が難しい。ただ、限定的なサンプルサイズのなかで学校外におけるプログラムが一定の効果を上げる可能性が統計的に示唆されており、データセットの問題などを整理しつつ検証を続けていきたい。

引用文献

安達 智子（2008）．女子学生のキャリア意識――就業動機，キャリア探索との関連―― 心理学研究，79，27-34.

リクルート就職みらい研究所（2023）．就職白書2023